



朝永三十郎博士  
(1871—1951)

## 清い交りを長く續け てもらつた

佐々木物一

○ 京都大學名譽教授文學博士朝永三十郎氏が亡くなつた。こゝ放送する夕方のラヂオニュースを聞いた時、私どもの驚きは一通りのものではなかつた。その頃、朝永君が——やはり朝永君と呼んでおく、肩書など添えることは、どうも今の私の氣分にそぐわない——弱つてゐるのではないかと何となく思われ、一度たずねてみようかと老夫婦で話し合つておりながら、雑事に取り紛れて、心ならずも怠つていたところであつたので、あのラヂオ放送は私も老夫婦にとつては實に霹靂のひびきであつた。これを聽いて、すまぬことをした、と、残念があつたのである。とにかく私だけ一人車をとばして、お宅をたずねて見た。何の意味で行つたのか知らぬ。弔問ということでもなく、とにかく行つて見たのである。お宅は、かかる場合の例に似ず、頗る静寂なものであつた。平素通される座敷の東北のところに、朝永君が寝ている。奥さんと令息とおもわれる一人の人にまもられてゐる。奥さんから聞いた臨終の時の様子は、朝永君らしく静かではあるが、あまりのあつけなさを感ぜしめるものであつた。

翌日夕近く、老妻と二人して弔間に出かけた。白い菊を靈前にお供えた。密葬はもうおんのでしたので最後の告別をする機会を失つたのは残念であつた。奥さんは老妻より白菊を受け取り、靈前に供えて下さつた。そして灯をともされた。その灯の光は神々しくかがやいた。

○ 朝永君との交りは、長いけれども、その交り方は平凡なものであつて、別にとりたてて人に告げるべきものはない。ただ、全體を通じて清い交りであつた、というてよい。それは朝永君その人の人柄のままものである。朝永君の人柄の特徴はいろいろい得ようが、私の感じでは、實に清い人柄の人であつた、という一言で盡くすことができる。私のような凡俗漢が、長く清い交りを續けることができたのは、朝永君その人が清い人柄であつたためである。いつであつたか、多分ハイデルベルヒの下宿であつたかとおもう。例によりいろ／＼の方面の話をした際、私が、どうも自分は、強いような又弱いような、俗なような又俗を離れたような、正しいような又正しくないような、きちんとしたような又だらしないような、いわば矛盾した人間でつまらぬ、というたことがあつた。朝永君は、すく、ふん、それでいいのだ、矛盾でいいのだよ」という意味のことをいふた。しかも、それが例の微笑をふくんでではなく、極めて眞面目な顔つきであつた。長い間交際してゐる間自ら感じたことであるが、朝永君の清さは、矛盾を克服してその上に立つ者のもち得る清さであつたのではあるまいか。それでこそ、私の

ような矛盾をふくむ人柄の者とも、清い交りを續けてくれることができたのではあるまいか。

○ かかる人柄の朝永君にとつては損とくということは問題ではないが、それにしても、友人の俗情として、朝永君は、世間的に損をしていたのではないかと私は私かにおもつていた。彼の學士院會員の稱號を授けられたことの如きも、私の感じでは、朝永君としては不似合に後れていたとおもう。誤解してもらつてはこまる。國家制度できめている學士院會員であるということが、それほど榮譽なものであるかどうか、又、學者に授與されるべき國家制度の榮譽などというものが、一般に存し得るかどうか、というような、問題は別であるが、學者にも學者であるの故に表彰されるべき國家的の榮譽があつてよい、という立場をとるとすれば、わが國の制度の下では、學士院會員の稱號を授けられることは、學者としての一の榮譽であるというてよい。その學士院會員としてわが朝永君が推薦されたのは、随分後れていたというてよい。朝永君と同じ系統の學界の人との比較は別として、この私自身に比較して見ても、十年近くも後に推薦されている。朝永君の如きは、私などに比すれば、よほど前に推薦されて然るべき人であると、私はおもつていた。その朝永君は私などよりもはるかに後に至つて、學士院會員に推薦されたのである。

○ 朝永君との交際は、同時に歐洲に留學し、殆んど同時に歸朝

して京都大學の教授に任命されてから、ます／＼親しくなつた。

ドイツ國では、同じハイデルベルヒ大學に行つた。これは申し合はせてのではないが、おのずとそうなつたのである。當時ハイデルベルヒ大學には、哲學にヴァインデルバンド教授あり、公法學にイエリネツク教授あり、朝永君はヴァインデルバンド教授に就て、私はイエリネツク教授に就て研究してしたのである。ところが、この兩教授は非常に親しかつたらしい。私は、イエリネツク教授の講義やゼミナールに出でいたが、ゼミナールの際教授がしきりにあくびをせられるのを見て、初めは、どうもイヤナ氣持がした。後教授が病氣で亡くなられたので、あの態度は多分病氣のせいであつたのだらうと、心の中で私の初めの氣持をわびた。そのイエリネツク教授の死去の時、一日、ヴァインデルバンド教授が、教場で、心からイエリネツク教授を悼む言葉を述べた、と朝永君は、私に語り、學問を異にする兩教授の友愛の關係を讚美した。當時私はイエリネツク、ヴァインデルバンド兩教授の交友關係について、豫め知るところはなく、ただ朝永君の右の話を聞いて愉快におもつた。ところが、イエリネツク教授死後半年ほど経て、教授の息下クトル・ヴァルター・イエリネツク發行で、教授未亡人によつてハイデルベルヒ大學法學部に捧げられた、教授の論文講演選集があるが、ヴァインデルバンド教授はそれに序文をかいて、その中に、「自分は、イエリネツク教授の獨特の力による生涯の仕事について、國家の學問の歴史において、歸せられるべき地位を評價するこ

とのできる者とは思わぬけれども、併し、次のことを、感謝の意を以て、述べることを得る。それは、イエリネック教授と知り合いになり、かなり長い道を、教授と手を携えて歩いたことを、私の生涯の價値に満ちた段階と考える」というのである。これは、ヴィンデルバンド教授自身のイエリネック教授に對する交情を示すものである。又ヴィンデルバンド教授は、更に、「そして、自分は、多くの者が、同じことをいうことを知る」と附言している。これはイエリネック教授にとつては知己の言というてよい。私は、朝永君から、ヴィンデルバンド教授の、イエリネック教授追悼の言葉を傳へ聞いた時には、ヴィンデルバンド教授の、そういう深い心をくみとることはできなかつたけれども、後に前ホヴィンデルバンド教授の文章を読んで、これを知つた。この兩教授の交情のことは、ここにはべる朝永君その人のことには關係はない。ただ、ここに朝永君のことを追悼するに當り、彼の兩教授が専門の研究室科目そのものを異にしつゝ、學問道を進む態度において、そして、恐らく、又、學問道を通じて一般人間的交通をする態度において親密であつた様子を、會て、ハイデルベルヒの容舎で朝永君と話し合つた當時のことを、おもひ出さざるを得ないのである。

○ 朝永君は政治に關心を持つていた。そして立憲政治を眞に尊重していた。ハイデルベルヒの下宿で、種々の問題について談論した中に、わが國の立憲政治の前途について、憂慮をふくん

朝永博士追憶

だ氣持で語り合つた機會は決して少くなかつた。この點或は意外におもう人もないと思はぬ。が、朝永君は、わが國で哲學など云々する者の中で往々見られる、政治というものを輕んずるような態度をとる人とは異つていた。いろ／＼の事項について、朝永君が、私の言葉に對して、「ああ、さうだ」と靜に、併し力に満ちて、同意を表した場合は少くないが、わが國の政治家の無理想や一般國民の政治的無關心を慨嘆する私の意見に、朝永君が同意する場合の、「さうだ」というその聲の靜な力は、今も私の耳にのこつてゐる。

天野貞祐文學博士が文部大臣に就任された頃のことであつた。一度は私が朝永君を訪うて、一度は朝永君の來訪を受けて雜談した中に、私は、「哲學者とか理學者とかいう、法律・政治・經濟の學者でない學者が、政治界に出て、大臣など引受けて成功する例は外國には珍しくない、わが國でもないではないが、いわゆる官僚式に昇進する場合が多い。政黨式政治の時代にはあまり多くない。三上忠造氏のような教育家出身の人もあるが、同氏は早くより政治界にのり出して、政治専門となつた人だから別だ。今天野博士が哲學者としての地歩を占めながら大臣となつて、政治の局に當ることは、賛成だ。大いに活動してもらいたい」と述べた。朝永君は、「ああ、さうだ」というて何かしら天野博士を賞讃するやうな言葉を述べた。私は、「ただ、今日は國會政治の時代だから、天野博士は大いに奮發して國會議員になつてもらいたい」というた。その時も朝永君は「ああ、さうだ、それはよい」とハッキリ同感した。これには私は

實けいさゝか意外であつた。天野博士が選挙に出て國會議員となるがよい、という朝永君の意見の根據についてはくわしくは聞かなかつたが、同君の合理主義の考方によるのであろうか。いさゝか意外であつたが、朝永君が私と同じ意見であることに力を得たわけでもあろうか、私は進んで、「そして天野大臣も政黨に入るがよい」というた。この、天野大臣入黨の私見には朝永君は同意の意を述べなかつた。「政黨にカネ」というて、ただ微笑を浮べていた。同君の微笑は、私との談話の時、折々見るのであつて、肯定の場合でも否定の場合でも共にその顔に浮べるのであつた。肯定の言葉を作う微笑もあつた。ただ微笑して何らの言葉をも伴わない場合には、否定と察せられることもあつた。天野大臣入黨の私見に對する微笑は或は否定的微笑に屬していたかも知れぬ。いずれにせよ、天野大臣の國會入りがよいという私見には、朝永君も明に同意したので、私は、「いつか、天野大臣に、君から、さうすゝめて置いたらどうだ」と朝永君にいうた。その後、天野大臣は朝永君に逢われたことがあるかどうか、あつたら、朝永君から、國會入りのすゝめを受けられたかどうか。

○ 朝永君は、その比較的晩年、その著作、「近世における我の自覚史」や「カントの永久平和論」やを持參して訪うて來て、贈つてくれた。前の發行の時にも贈つてもらつていたが、今の發行のものに接して、知識を新にしたのである。研究や著作やについていろいろの話、殊にその難しさの話が出た。それで、

私は、哲學史の一般的の著作をしてもらいたいとのんだ。これは今に始まつたことではない。時々くり返したのむことであつた。私は、それが中、容易な業でない、という朝永君の學者的良心の同一ことをよく知つてゐる。それにも拘らず、こんども、又、さういふ話に及んだ。哲學史というような著作が、とても容易な業でないこと、それが特に學者の良心の人に待つべきであることを知つてゐるので、私は、朝永君の如き人に特にたのむ氣持をもつていたのである。朝永君は、いつもの場合とは多少異なり、自分もやつてみたいとおもふが、中々できぬ、哲學史などというものは、ただおもいつきでは語れない、原典——こゝろいふ言葉でいうたかどうか、今ハッキリとしないが、とにかく、學者の著作そのものから直接に知ることであつて、いわゆる孫引でないことを意味するものと、私にはおもわれた——によらなくてはいけないので、中々面倒だ、というようなことを語つた。こゝろいふ氣持は、私などのような不敏な學徒にもよくわかるので、私の方から、それはさうだ、と、朝永君のいつもの口調を學ぶの外なかつた。そして、朝永君の態度に、専門は異なるが、學問的良心の鋭さを平素よりも一層強く感得した。

ああ、わが朝永君は清い人柄の人として始終した。朝永君から清い交りを續けてもらつたことは、私の今日までの生涯の幸福であり、又刺戟でもあつた。今後の生涯——さう長くもあるまいが——にとつても同じ意味を持つてあろう。

（筆者 京都大學法學部「憲法・行政法」名譽教授  
法學博士・學士院會員）

## 朝永先生の思出

天野 貞 祐

明治四十二年にわたしは當時の京都文科大學哲學科に入學、四十五年卒業しました。あたかもこの三年間が先生の外國留學の期間であつた爲に學生として先生の講義をば聴くことができませんでした。しかし先生の著書論文からは實に多く教えられました。その頃高等學校には哲學といふ學科がなく、一般社會にも今日のように哲學思想が普及していなかつた時代にわたしがいつも座右において教を受けたのは先生の著わされた「哲學辭典」でした。この書の初版は明治三十八年に出しましたが、わが國最初の本格的な哲學辭典であつて、しかもこの菊版五百頁の辭典は先生の獨力に成るものだと言ふことです。これを一人の力できつくり上げるというのは並大抵のことではない。先生がどんなに勉強家であつたかはこの辭典でわかると思ひます。先生の文章の非常に明晰であつたのは辭典における概念限定の苦勞が役立つてゐるのではないのでしょうか。辭典のほか「人格の哲學と超人格の哲學」もわたしの座右の書でした。先生はショーペンハウエルの哲學に關する長論文を「丁西倫理會講演集」に發表されました。わたしがこの哲學に興味をもつに至つたのは Dausan : Elemente der Metaphysik と先生のこの論文に啓發された爲でありました。このほか「哲學綱要」後

に「近世における我的自覺史」等の諸著がわが國哲學の發達に對して與えた大きな寄與については語るまでもない所でありま

す。  
わたしが卒業して哲學研究室の副手を勤めていた時に先生は歸朝されました。いかにも學者らしく、いかにも大學教授らしい長身な先生の風貌を今日もなおわたしは眼前に思い浮べることができます。わたしの生きてゐる限り先生のこの風貌はわたしの心から消えませんが、こゝに先生の京大哲學教授としての生活が始まり昭和六年までつゞいたわけですが、その間先生が教授といふ職をどんなに嚴肅にお考えになり、どんなに忠實にそうして立派にその義務をお果しになつたかは教を受けた者の異口同音感謝をもつて語る所であります。『京都帝國大學文學部三十周年史』のついでに「軍荷を背負うて峻坂を登る鷲馬にも喩ふべき深き苦しみを嘗め」という先生の御言葉からも察せられるのであります。「深き苦しみを嘗め」といふ言葉はわたしなどにも強い實感として身に迫るものがあります。京大文學部ではひとが學問をしたがつて教授の職を嚴肅に考えひとりびとりが眞劍に學問ととり組み職務に對しました。それはわたしなどには實につらいことでしたが、しかし學問と人間とにおいて卓越した人達を先輩とし同僚としたことはまことに無上の幸福でありました。かような學風が京大文學部の傳統として、廣くさらにわが學界の風潮として永く榮えることを祈らざるをえません。

先生はまた後進のために實に親切な配慮をなされました。わ

たしはそういう實例をいくつも知つておりますが、こゝに無遠慮に一つの場合を語ることをゆるされたい。今日では社會の各方面から引張瓶の日高第四郎君にも一時失業失意の時期がありました。それを三高教授に復活させたのは幸く先生の親切と熱心とによるものでした。その日高君の發展は専ら木人の力量によるものと言つべきですが文部教官への復活は先生の力なくしてはできなかつたことで、日高君の今日あるについて、先生に負う所の極めて大きいことは日高君自身の認め所だと思ひます。わたしなどもただ先生にはお世話になつたか知れませんが、一々のことはこゝに述べかねますが、先生を思うにつけて何よりも先ず心に浮ぶのは實にいろいろとお世話になつたということ。もともと大學教授に成らうなどという考は全くなく、早く大學を去つたのに再び大學へ歸り、停年まで勤めるに至つたことについては先生の御配慮に負う所が一通りではない。それなのに先生に對してはいろいろ相濟まぬことばかりして來ています。その一つでわたしがいつも心ぐるしく思つてゐるのは先生の「滯居祝賀論文集」を編集したまではよかつたのですが、それに後記をしるさなかつたことです。當時わたしはまだこの種の文章に全く自信がなく後記など下手なものを書くよりは無い方がよいかと思つたのです。今にして思つて非常に識至極のこととお恥しい次第です。そのほか先生から見たらばわたしなどい分わがまも勝手なこと多かつたでしょうと當時を追想して申しわけなく思つばかりであります。

わたしだけならばまだしも、わたしの親友九鬼周濬君を先生

方にお願ひして京都大學へ招聘していたところ、この友人がいろいろの關係において先生の御厄介になつたこと一通りではありません。けれども先生の寛大なお考えのおかげでそのユニークな天分を發揮し先生の後繼者として輝やかしい存在となりましたのはほんとうに有りがたいことでした。彼は昭和十六年逝去しましたが、死ぬ間ぎわまで先生に對する感謝をわたしに語つておりました。

先生は實に正しい人でした。人格者という言葉は先生において文字通りあてはまる氣がします。西洋の學問をされた自由主義者ですけれども武士の魂をもつた日本人らしい日本人でした。どこをどう叩いても決してホコリのない徹頭徹尾清く正しい人でした。西田先生はめつたに人の批評をされませんでした。だが或時一朝永君はリライアブル（信頼できる）だ」と言われました。ほんとうに心の底から尊敬できざる立派な人格者でした。わたしは公務に妨げられて先生の御雜儀に列するをえず、一週間ばかりおくれしてお宅に上りました處、いつもは必ず出て來られる先生がもはや出て來られないのがたまらなく悲しく、悲痛一時に全身を震い來り言葉も出ませんでした。先生はどういう點から考へても幸福な方でした。それにも拘らず居られた先生がもはや居られないということはわたし達にとつてほんとうに寂しいことです。たゞ先生の尊く美しい記憶は人の心のうちに永久に生きること信じ、わずかに慰めたいと思ひます。

—一九五二・八・二九—

（筆者）京都大學文學部（倫理學）名譽教授  
文學博士・前文部大臣

## 朝永博士の萊府

### 時代を顧る

佐武安太郎

△私が朝永さんを知る様になつたのはライプツヒでの止宿アルムハウス家である。明治末年。アルムハウスは五十幾位。多くの外國語をよくし、大審院等裁判所關係の通譯をして居た。後、七十歳の時裁判所關係の高官から丁重な視詞を受けた。

抑々の起りは、眼科の井上誠夫博士二回目の留學の時、先年の下宿に行つて見ると、この家族に代つて居た。昔を話したら、心よく受入れて呉れた。それから、日本人が一人、二人連續下宿した次第。後年、朝永さんの長子振一郎君も亦アルムハウス家に寄寓した。

△朝永さんと私は年齢の上では一廻り違つて居る。無慮慮な書生論を、微笑したり、蹙蹙したりし乍ら聞いて下さつた。或る時には容められたこともあつたか。その一寸笑ふ様な、面白がる時の眼付や、口元の動きには特徴があつた。怒つたり、叱る様の眼付は記憶にはない。お伴してニーチェの墓に詣つたこともある。

△「生理學者の哲學」についての感想を聞いたこともある。それは、西田先生の所論として話された。此話は此方から聞き出

したのではない。後年、西田先生が仙臺に御來訪の時も承つた。礪、坂口、内田諸先生、さては平井先生（小兒科）についての噂話も面白かつた。

私は西洋史の如きは、我國では大體は結局のところ、西洋史家を祖述するといふか、その間を縫ふより外致し方もあるまい、素材は日本では入手し難いものと考へて居た。この書生論から話は進んだのであつたが、朝永さんは言ふ。西洋哲學史の研究は正にその通り。しかし、例へば、その發達には基督教の影響がある。その所を吾々の觀方で研究して行けば、又別趣の様相を捉えることにもならうか等と。

△朝永さんは人や物の批評でも、自らの行動でも中庸から外れない。際どい所へ行かなかつた。

が、少くとも人を觀るのは甘いと思はれる場合があつた。尤も、之は隔つた領域に住んで居る人に就いて丈かも知れぬ。例へば、後に議會等で「仙人」と呼ばれた田淵君に對しては、當時朝永さんは相當期待したものであつた。但し關東大震災後の京都遷都論には私は賛成であつた。それは私の持論である。

△當時萊府には上田整次さんが居られた。後の東大獨文學の教授。同氏と自分は偶然共食を共にして以後、多くの教を受けた。その薦めで元俳優について、ナターニヤルワイゼの數節をうなること二、三ヶ月。その擧句、裁判所公判廻りをして耳を試して見た。唯大審院では譯張り分らず、未だしと思つた。しかし、數年前垂水控訴院長に其事を話したら、それは當り前の事で氏等でさへ突然日本の大審院へ行つたので



は分らぬものだ相である。上川さんは道流、鴨外邊から漱石、櫻牛、竹風等明治大正の文壇裏面史、さては井上馨侯の骨董辯等際どいことを色々話された。書生上りの吾々の仲間には氏の弟子が多かつた。痛い所を突かれるので近づき難いと思われた様であつた。その所論は實に背筋に中つて居た。

その當時は誰も朝永、上田兩人を並べて觀る人は居なかつた様だ。實に、兩氏の性格、行狀粗比較すべき何物もなしとも言へる。

△上述、アルムハウス翁は語學の達人たるのみならず、實に博覽強記であり、人格者であつた。又中々の藏書家で、日本の大學でこれを買つたらと思つたことさへある。古稀の視の時、我國の知人から金圓を贈つた。筈まめな翁から一言の返事も無い。世話人が困る。事務報告が出来ない。再三再四頼むと、曰く、心中の有難さを減らし度くないからと。金銭に淡泊。此人は又人を見る目があつた。日本人だとして誤らなかつた。朝永さんより點數は幸い。そして此のアルムハウス兄妹は朝永さんには敬慕の念を持つて居た。

△朝永さん中年頃の聖護院西門内の住居がその御夫妻には御似合の様思はれた。

此道悼録には夫人の御思出、朝永さん亡き後の數々の御歌を拜し度い。

△我國原子核物理學の双璧が京都文學部教授の令息であることは目出度い。奇縁か否か。秀樹博士の文には「一地理學者の生涯」の筆致がよく傳はり、振一郎博士の風貌、人柄に

は御兩親が渾然として顯はれて居る。一九五二・八・一七

(筆者 東北大學醫學部「生理學」名譽教授  
醫學博士・學士院會員)

## 追憶 一つ

山内得立

朝永先生に初めてお目にかかつたのは何年頃であつたらう。

今はあまりに遠い昔なわけはつきり記憶にないが、たしか私が京都大學の二回生の頃であつたかと思う(大正の初の年か)。

先生が外國留學を終えて歸朝せられ、その歡迎會をかねて學會が攀友會館でひらかれたが、私も末席に列して初めて、あのすらすらとした清楚な御風貌に接し如何にも洋行歸りの高雅な學者といつた感じをうけたことを覚えてゐる。その會で如何いことが話されたか全く記憶にないが、たゞ一つ今でも覚えてゐることは、「ハイデルベルク大學でウインデルバントの講義を聞いたが、期待していたほど面白くはなかつた」という意味のことを言われたところ、早速桑木先生が少し皮肉な調子で「それは君が日本にあつてウインデルバントの著書を大方讀んでいたからだ」と言われたのである。すると朝永先生は別にそれには答えず、たゞニヤツと笑われた。それが如何にも印象的であつた。あの笑はその後先生に接し屢々出遭つたところのものであるが、何だか先生の人格をよくあらわしているように思えてな

らぬ。勿論豪放な嗤笑ではなく、また意地の悪い、皮肉な笑でもなく、さりとて所謂微笑でもない、全く先生獨特なもの靜な、少し氣持のわるい、しかし決して冷めたくないものであつて、先生を憐うたびに思ひ出でられるものはあの笑であるのである。先達つても先生の葬儀の後親しい人々が集つた席上、御令息の振一郎氏が「親爺は人が悪く、誰かに人の悪口を云わして自分はほくそ笑んでいた」と語られたが、多分そういう場合にも例の如くニヤツと笑われたのであろう。先生は決して人の悪口を言われなかつた。第三者に言わせて自ら楽しんでいるともとれるが、先生にはさういふ惡趣味は決してなかつた。ただニヤツと笑われる、その笑の中に凡てがふくまれていたように思う。私は後に公私ともいろいろ先生のお世話になり、殊に私の至らぬ非常識から先生には數々の迷惑をかけたが、決して頭からどなられるというようなことはなく、たゞ理非曲直をはつきり指摘して言明されるので、却つて痛切な自省を促され、いつも頭のさがる思いがしたものである。

先生に最も敬服するのは學問上にも人生についても極めて「明晰」であつたということである。先生ほど公私の區別を明かにし、思想と行爲との凡てに亘つて明晰であつた人は稀れであるであらう。専門の哲學史の研究にしても先生の理解や解釋の仕方が如何にも明晰であつたことは何人も認める點であるが、先生の生活の凡ゆる方面に、暗い所や、うしろめいた點が一つもなかつた、知性とフマニテイトがどんな隅々までも行き亘つていて非の打ちようのないような生活態度であつた。時に餘り

に公明であるために、或種のものたらなさを抱かせることもなくはなかつたが、しかし人間としてあれほど缺點の少いことは稀有のことでなければならぬと思われる。それは全く天資と教養とのなせる玲瓏玉の如き人格であつたであらう。晩年先生は「自分は長く生きすぎた」とも漏らしていられたが、それほど先生の魂は美しいものであつた。

それにしても凡てに明晰な先生にしてただ一つ不明なものがある、それはあの笑である。あの笑は如何いいう意味をもつたものであろうか。愛するものに對しては勿論あの笑を以ていつくしまれたであらう、が憎むものに對してさえ先生はあの笑を惜まれないであらう。輕侮すべきものに對してはいうまでもなくあの笑を以て臨まれたであらう、が重んずべきものに對してもあの笑を以て遇することを憚られなかつた。靜なるものに對してはさらに靜なる笑をたたえていられたが、烈しく動くものについても尙先生はあの笑を失われなかつた。樂しきときは勿論笑われたであらう、しかし苦しく惱めるときでさえあの笑を笑ひつゝじつと人生をかみしめていられたように思う。そう思うとあの不明な笑も私には何だかわかるような氣もする。あの不明な笑も亦明晰であつたのである。

（筆者）  
京都大學文學部「哲學」教授  
文學博士

——一九五二・八・二五——

## 師恩を偲ぶ

## 日高第四郎

朝永先生の學問的業績について紹介し記述するには別に適當な人があるであろうし、私にはその用意も資格もない。私が先生方について哲學を學んだことはあたかもローマ人がギリシヤ哲學を學んだようなもので私の學問は物の數ではないからである。しかし先生の御人柄については私にも語るべき經驗と材料とが澤山ある。それでこゝには一人の弟子の眼に映じた先生の面影を私事にわたるのをゆるしていただいで綴つてみたい。

私は顧みて自分が哲學科の學生として二十歳臺の三年半を京都大學に過ごしたことは一生にとつて誠に有り難い仕合せだつたとひそかに信じている。一高の法科にいた私は自己の學問的素質に對する不安を痛切に感じ乍らも、人生における精神的療り處を常識に求めることが出来ないと言わば巡禮の如く京大の哲學科に辿りついたのである。その導きの糸となつたものは、西田先生の「善の研究」と朝永先生の「近世における我の自覺史」と波多野先生の「基督敎の起源」であつたと思ふ。私は在學中心身ともに病める、しかし自ら顧みて可哀相だつたとさえ思ふ位生眞面目な學生生活を送つたが、その間この三人の恩師からそれぞれ別の意味で一生忘れられない深い感化と影響をうけたことは實に感謝に堪えない處である。その内最も持續的に

一番水く色々の意味で御恩をうけ又可愛がつていただいたのは朝永先生である。

私をはじめて先生の風手に接したのは第一次世界大戰の終りの年即ち一九一八年の九月哲學史の普通講義の席であつた。その頃先生はモーニングに縞ズボンを着されて、手に小形の紙切れをもつて講義をなさるのが常であつた。巾はせまいが額の長い眉毛の濃い眼の澄んだ上品な先生のお顔を見上げ乍ら、明快な齒切のよい瞭然とした講義をきいて感動したことは幾度であつたらうか。ことにプラトーンやアリストテレス、デカルトやスピノザ、カントやフイヒテやヘーゲル等の大哲人の所説をどちらかという建築の設計圖とでも言う様な分析と敘述とをして下さつたのである。一九二二年の春卒業論文にカントの實踐哲學に關する小論を出した際、西田先生藤井先生と共に先生も口頭試問の試験官として立會われた。道徳律と感性とをブルノ・バウフの示唆に従つて *Form-Aktive* の對立・補足の關係として解釋した二元論的な私の論文に對して西田先生が、如何にしてこの二つの結合が可能であるかと質問されたのに對して、私がドキマギしているのを見て朝永先生は「君はどこかに *Actum* を兩者の結合のシェーマと解する」と書いていたねと救いの手を差し延べて下さつたことは今も忘れられない。

卒業前から京都の一中の講師に御世話下さつて京都に居残れる様御配慮下さつた西田先生の御厚意に、止むを得ぬ家庭の事情からとは言え、叛いて東京に歸つて三年を過ごした後、一九

二六年廣島高等學校へ就職する際に、當時の同校の校長十時彌先生に推薦して下さつたのは朝永先生であつた。八年後一九三四年私は廣島高等學校の騒動事件に連座してその教授の職を奪われた。この前後私は自分の一徹な激越な性格と直截な言動から甚だしい誤解と中傷をうけ文部省には學生を煽動したマルクス主義者の如く報告され半ば教授として再起する途を斷たれそうになつてゐた。この時西田先生、前校長十時彌先生方と共に先生は實に親身も及ばぬ御盡力を下さつて誤解を晴らし、翌一九三五年の暮にやつとのことで三高に奉職することが出来た。私は先生方の御庇護と知遇に感激すると共に三高の森校長の寛容と理解とに報いんとする一念から、學者たらんとする念頭をブツリ諦めた。その代りに多くの教授の最も嫌う生徒主事の役割を覺悟して引受け一切の煩わしさを厭わず勤める決意を立てたのである。尤も學問を慕ひ研究生活を羨む心は遂に今日まで斷ち切ることは出来なかつたけれども、一九三七年の日支事變以後天野教授の下で京都帝大の學生主事になるに及んで、一層しばしば諸先生を煩わし、右翼の攻勢への対策や左翼の學生の思想問題等について過誤なからしめんとして高邁中正にして寛容なる先生の御智慧を拜借するところがいよいよ多かつた。一九四三年の春私が一高に赴任する際には、非常に名残を惜んで下さつたと同時に、迫り来る戦争の危険の前にしじみ憂慮と激勵を賜わつた。敗戦後一九四六年の五月思いがけなくも私が文部省の學校教育局長に轉向せざるを得なかつた時、——多くの行政経験者が追放せられ、行政官としての経験の全くな

い私が捨て身でたゞ「常識と論理」で仕事に立向わなければならないハメに陥つたことを申上げた時、先生は靜かに、「誠實と愛國の至情を以て」と仰言つて、私の秘めたる心の涙腺を握られた。一九四七年の夏頃、私が小學校の先生方の爲に新教育の理念として民主主義の人生觀的背景について私見を述べた講演の速記を御覽になつて、先生は態、ハガキを下さつてアメリカ流の民主主義とは色合を異にしたもので自分も同感だと讀めて下さつたのには恐縮した。

文部省の役人になつてから旅行嫌いな私は、多忙を種に出来るだけ出張は他人に譲つて來たが、關西ことに京都への出張だけは例外であつた。その譯は他でもない、精神上的の親の様な朝永先生にお目にかかりたいからであつた。先生の靜かな溫容に接し、あの知的に精鍊された美しい風格に對し、その澄み切つたまなざしを仰いで、當面せる複雑渾沌たる難問・祖國再建の爲の憂慮等を包むことなく訴えて、先生の正義感の靜かな反應や公平な哲人にふさわしい判斷をきかせていただくことが、先生には御迷惑であつたかも知れないが、私には、この上なき慰めであり勵ましであり力であつたからである。

思えばことに三高就職以來日常この優れた哲學者に師事し得たことは忘れ難い幸福であつたばかりでなく、謙虛な先生も眞樸も私や家内を家族的な友人扱いをして下さつたことは實に忝けないことであつた。例えば今は嫁いでいる長女の婚姻の問題まで御配慮下さつたことなど、その御厚情は全く勿體ないと思つてゐる。

かゝる盡きぬ恩顧に報いることは不可能であるにしても、その御期待と知遇を裏切らぬ爲にも所信に誠實で勇敢でなければならぬという思いを幾度新にしたことか。

昨年九月十七日京都大學に學生補導研究會の開會式に參列した直後 私は先生を近衛町のお宅にお訪ねして約一時間お話しした。その節先生は八月十日に急逝された御親戚の關口鯉吉博士を悼まれ、未だ生きていくれないと困る人だのと言はれ、私のように八十歳にもなつてもう何時死んでもよいものとは違ふのにも仰言つた。その夜私は公用の爲急いで東京へ歸つたが翌十八日の夜、先生の御逝去の電報をうけて果然とした。でも最後にお目にかかれてよごさんしたねと家内に言われても何だか急に力のぬけるのを覺えた。トタンに京都に魅力がなくなつてしまつた。思えば一昨年の十月先生に前からお願してあつた御揮毫をいたした時、先生はこれで約束を果たしたからもういつでも死ぬると奥様の前でたわまれて仰言つた。いやですよ死ぬ死ぬつてそんなにからかつてという奥様のお言葉に對して先生は、本當に死ぬのは厭ではない、けれども長く思つて人に迷惑をかけるのはたまらない、腦液血か、心臟癱痺で一思に死にたいものだなとも言われた。

先生の最期の御様子を伺うと恰も先生が言われた通りであつた様で不思議な氣がする。平素むしろお弱い身體を學者としての使命を究うする爲に周到な養生をなさつて八十歳の天壽を究うせられたところにも先生のお人柄の一端が偲ばれる。

（筆者 關國百年記念文化事業  
會理事長・前文部次官）

## 朝永先生の微笑

田中 美知太郎

八八

朝永先生について、いつも先づ思ひ出すのは、先生の微笑である。一時よく用ゐられた言葉で言へば、それは微笑といふよりも、むしろ微笑であつたといふ氣がする。先生は私のやうな者に對しても、我を主張するといふやうなことはされずに、やはり我をおさへて、我慢されるやうなことが多かつたやうに思はれる。何とも恐縮に堪へないことである。私の學生の頃の宿は、吉田二本松にあつて、先生の近衛町のお住ひには、わりに近かつたので、どの先生のお宅よりも、氣輕に、度々お邪魔に上つたやうな氣がする。そして既にその時から、例の微笑をもつて、私に對されたやうな氣がするのである。ある時、私は遠慮のないといふよりも、むしろ不躰なとでも言ふべき質問をしたことがある。それは先生が、なぜ特に哲學史を選ばれたかといふ意味の問ひであつたと記憶する。その時、先生は例の微笑をされて、ちよつと問をおいてから、教師をして、いろいろた授業をもたされてゐるうちに、哲學史みたいなものを作ることにまつてしまつたので、どうも大した動機はなかつたやうに思ふといふ、お答であつた。「近世における我的自覺史」の著者は、正面切つた答を回避されたわけなのである。先生に

は、さういふ都會人的なセンスがあつて、人生の一大事といふやうなものを、ひとには言はせても、自分からは言はれなかつたやうに思ふ。哲學青年じみた感激が、當時の京都哲學科のなかに、何かあふれてゐたやうにも思はれるのであるが、そのなかで先生は、何かちよつと閉口したやうな微笑をされてゐたのではなかつたか。そして私などの無作法には、最も閉口されてゐたのではないかと、今でも恐縮に思ふことが多い。西田先生と一緒に、私のことを批評された言葉を、よそから聞いて、參つた覚えもある。

ひとつの傳説みたいな話に、私が寝ころんだままで、先生と應對したといふのがある。これはいくらなんでも、少しひどい話である。こんど京都へ来るやうになつて、二度目か三度目かに、先生にお目にかかつた時に、先生にそのやうなお記憶があまりか、どうかをお尋ねしたら、その時の先生は、すましたお顔で、そんなことは記憶してゐないと言はれた。先生のすましたお顔から、私は自分に都合のよいやうな解釋を引き出して、ひとまづ安心したのであるが、さて自分自身の記憶はといふと、ちよつと引つかかるところがあるので、安心しきれないで、弱るわけなのである。先生が大して氣にもとめてをられないで、何とか本當に忘れてしまつてをられることにしたいものである。先生の應接間は、支鬮の左手にある、リノリウム張りの、長細い室で、ここは洋式になつてゐたから、私も寝ころがるとか、種になるとかいふことはしないわけである。少し長座をしてゐると、お嬢さんがコーヒなどももつて来て下さつたりし

たので、私も行儀をよくしてゐたつもりである。そのやうな折、先生は哲學史といふものについて、ヴィンデルバンドやフィッシャーなどの書物も、一概には頼れず、段々懐疑的になるといふやうなことを、氣弱く、しんみりした調子で言はれたこともある。私も大いにかしこまつて、そのやうなお話を拜聴したことを覚えてゐる。さうすると、傳説のやうな話は、いつたどうなるか。私の記憶では、ギリシア語の先生だつた菊池憲一郎さんと、ほかのギリシア語仲間も一緒に、先生のお宅に上つたことがあつたが、その時は二階の、先生のお仕事をををられたらしい——アダム、タンヌリ版のデカルト全集が、やや亂雑にほかの書物と一緒に、床の間におかれてあつたやうに覚えてゐるのであるが——さういふお部屋へ通されたことがある。それは和室だつたので、話の間に、私はよりかかるところを求めて、壁か柱のところへ退却し、ほかの諸君の後の方で、ひよつとすると手をついて、身體を段々横にするやうな、姿勢になつたのではないかと思ふ。しかしそれで眠くなつたわけではないので、時々話の中へ割りこんで、何か發言してゐたやうな氣がする。菊池さん——本當は菊池先生と呼ぶべきであるが、先生がまた亂暴な口のきき方をする人で、私も負けない氣で應對してゐるうちに、この若い先生は、先生だか、友達だか分らなくなつてしまつて、そんなおつき合ひを、ずつと亡くなられるまでつづけて來たので、どうも菊池先生では、改まり過ぎて、私の氣持にびつたり來ないから、やはり菊池さんといふ呼び方を、許していただきたいのであるが——その菊池さんも、今言つた

やうに、わざと亂暴に振舞つたりされる人であつたが、太當は氣の弱い、お金持の坊ちやんだつたので、かへつて私のその時の言行を氣にされてゐて、そのことを他の人に話されたのが、まあ傳説の起源のやうなものになつてゐるのではないかと、私は考へる。

## 二

無論、朝永先生御自身は、大へん行儀のよい、おとなしやかなお方であつたと思ふ。しかし他面において、漢慮のない、少し亂暴な位の者を、ただ我慢されるといふよりは、むしろ好まれるところがあつたのではないかと思ふ。菊池さんなども、その一人で、菊池さんといふ人は、大げさに誰の悪口でも言ふ人であつたけれども、朝永先生だけは、いつも口を極めて、ほめてゐたことが思ひ出される。先生だけでなく、先生の車様のことも、いつもほめて、私たちに話してゐた。先生は菊池さん、漢慮のない悪口を愛されたのかも知れない。そして菊池さんも、先生のお宅を、一番氣兼ねのいらぬ、訪問先にしてゐたのかも知れない。私自身も、はじめに言つたやうに、宿が近かつたためもあつて、わりに度々お邪魔に上つたのであるが、それにはまた氣安さといふやうなものが、先生のお宅へ伺ふ時に、一番よく感じられたためかも知れないのである。そして大學を出た時にも、先生から世間的なことでは、一番よくお世話になつた。私の「テアイテトス」譯は、先生のお口添へによつて、岩波から出ることになつたのであるが、岩波氏が學校を出たば

かりの私に、約二年間、毎月當時としては多額の研究費を出してくれたのは、ただ先生のお言葉を信用したからであると言はなければならぬ。先生のお宅へは何つてゐたが、先生の演習その他には、出ることも出来なかつたやうな、全くの方角違ひの、弟子とも何とも言へないやうな私のために、先生がそれだけのことをして下さつたことは、何としても感謝に堪へないことである。しかも今になつても、なほ心苦しく思ふことは、折角の先生のお口添へがあつて、岩波氏にも、すぐ出来るやうに約束した、「テアイテトス」の翻譯が、なかなか出来上らずに、十年餘もおくれてしまつたことである。これには、先生も一方ならず、お心配にもならぬ、時には珍しく、お立腹のお様子で私に早く約束を果すやうにと、お手紙を下さることもあつた。これには私も、一番こたへた。しかし何としても私には、さう早く約束を果すことが出来ず、時には、ずいぶん失禮なお返事をしたやうに思はれるので、今でも思ひ出して、恐縮してゐるわけなのである。「テアイテトス」譯につけた、こまこました註は、ただ先生に對して、仕事がおくれたことの、まあ申し譯のためであるとも、言へば言へるやうなものである。先生はさういふ約束とか、義理とかいふものに對しては、きちんとしたことを好まれ、その點に神經をつかはれることが、多かつたのではないかと思ふ。しかし當時の私には、そのやうな察しもつかず、仕事が第一で、仕事がちんとなしないで、約束だけきちんと守つても、仕方がないではないかといふやうな、勝手な考へ方で、先生の御心配を、それほどに感じなかつたのは、今に

してまことに申し譯ないことだと思つてゐる。

私が大學生へ入つた年、たしか先生はヨーロッパへ出張されることになつてゐて、講義は集中的に行はれてゐたやうに記憶する。大へん明せきな、きちんとした講義で、頭へ入りやすかつた。そしてドイツ語の發音の正確だつたことが思ひ出される。

お宅に伺つた時、ドイツ留學時代のお話があつて、會話がなかなか出来ず、宿屋で宿帳に署名したら、宿屋の者が、Oh! Sie schreiben! と言つて、驚いたといふ話されたが、その Oh! Sie schreiben! が、うまく調子が出てゐて、きれいな發音であつたことを、今でも覚えてゐる。先生の御様子には、昔流に言へば、鶴の如くといふところであらうか。しかし色調は、いつも黒つぽかつたやうに記憶してゐる。そして戦後、私が京都にやつて来て、昔の感覚だけで、間違へずに先生のお宅を探し當つた時、出て來られた先生も、昔の面影がほとんど、そのままであつたのを、何よりもなつかしく、また嬉しく思つた。しかし先生も奥様も、もうすつかり年をとられてゐて、昔の通りのお宅も、やはりずいぶん古くなつてゐるのに、二十年以上の歳月の流れを痛感しなければならなかつた。そのことを、家の古くなつたといふことで申し上げたら、手入れが行きとどかない申譯をされたので、ちよつと困つた。もう足許が不安で、あまり外出もできないといふお話であつた。しかしその先生が、關西哲學會の發會式に、わざわざ出て来て下さつて、式辭―その中には、ホチ・エステンといふギリシア語がはさまれてゐた―をのべて下さつたのであるから、まことに恐縮であると共に、

また先生が私たちに、なほ依然として寄せて下さつてゐる、御好意に對して、心から有難く思つた次第である。懇親會の席上、少量のビールに、心よく酔はれて、例の微笑―「こんどは微笑ではない―」をたたへてをられたお顔が、今もなほ目を離れてゐるが、先生は生前においても、家庭的にめぐまれ、奥様を大へん大事にされたといふやうな話も聞いてをり、お仕合せな方であつたと思ふ。先生が微笑しながら、私のやうな者のお掛けした迷惑を、まづ我慢していただけたのも、根本において先生が、お仕合せな、めぐまれたお方だつたからだといふやうな氣がする。

（筆者 京都大學文學部、西洋哲學史）教授  
文學博士

## 恩師朝永先生の

三 井 浩

### 一 哲學史の思い出

私の机の上には、先生の恩師ザインデルバントの寫眞が、立てられてゐる。これは、ひと月ほどまえ、御長男振一郎さんのお宅にお伺いしたおり、先生の奥様から頂いてきたものである（振一郎さんからは、からくさ模様のペーパーナイフをいただいた）。厚いガラスの寫眞立ても、おそらく、先生がハイデルベ



ルヒから持つてかえられたものであろう。寫眞は陽にやけて、白くうすれてしまつてゐる。

先生がヴィンデルバントにお逢ひになつたのは、明治四十三年、先生の四十歳の時であつた。先生は西洋哲學史研究のために、獨逸英に三ヶ年間の留學を命ぜられたのであるが、そのうち約二年間を、ヴィンデルバントについて學ばれたのであつた。先生が留學期間中、主としてヴィンデルバントのもとに留られたのは、ヴィンデルバントの嚴正な學問の良心と謙虛な人柄とを敬愛されたからであつた。先生は晩年「ドイッでは多くの學者にあつたが、すこしもセアトリカルなところのない、高僧のような風格のヴィンデルバントに一番頭がさがつた」と語られた。先生のお話しによると、その頃、ヴィンデルバントの西洋哲學史講義は、二ヶ年（四ゼミナール）で西洋哲學史全般にわたることになつていて、第一ゼミナールは古代中世、第二は近世前期、第三はカント、第四はカント以後で、これと並行して演習（第一ゼミナール、プラトンの「パイドン」、第二、デカルトの「省察録」、第三、カントの「純粹理性批判」、第四、フイヒテとかヘーゲルとかその時によつて異なる書物、を使つて）を行つていたさうである。これで見ると、當然のことであるが、カントが全體の四分の一を占めている。先生は東大卒業後たちちに眞宗大學の教壇に立たれたのであるが、その時まづカントの「フロレゴメナ」を教本として採用されたさうである。また先生がその處女作「哲學綱要」を編むにあつて主な藍本とされた「哲學概論」の著者バウルゼンも、カントの祖述者のひとりであつた。だから、留學以前すでに、相當にカントには通じてをられたはずである。しかし、ヴィンデルバントに親炙することによつてはじめて、カント哲學の哲學的ならびに哲學史的意義を會得することができたのであつた。これによつて先生はそれまでの、科學と宗教とを形而上學によつて直接に（嚴密な認識批判なしに）調和せしめようとする思想傾向から脱脚することができ、「嚴密に學的にして、しかも人性に對して指導の力を有する」哲學の道を見い出されたのである。

歸國後たちちに、この「再生」の精神をもつて、發表せられたのが、先生の名著「近世に於ける我的自覺史」である。（先生は本書以前の著書を絶版に附せられた）。これを構成している兩篇とも、ヴィンデルバントの哲學の敍説をもつて極をむすび、またその展開の仕方、ヴィンデルバント（及びヴィンデルバントの恩師クロー・フィッシャー）の精神をうけついでいる。

本書はその後、先生の晩年にいたるまで、しばしば改修をほどこされ、ある點においては明らかにヴィンデルバントを越えていると考えられる箇所もいくつか見い出されないわけではないけれども、全體としてはヴィンデルバントの立場をます／＼より明瞭にあらわす方向に進んでいる、ということが出来る。また、その超越も、この方向においてなされている。このことについては、角川文庫版の「近世における我的自覺史」に附した「解説」で述べたので、詳しいことはそれにゆずつて、私はヴィンデルバントの哲學史に對する先生のお考えと、それに關

連して先生御自身の西洋哲學史とについて、思い出風にかたることにしたいとおもう。

先生は晩年にいたつても、一般哲學史のうち最も讀み甲斐のあるものとして、ヴァインデルバントの『哲學史教本』を推せんしておられた。その時期時期に支配的であつたいくつかの中心問題をとらえて、それについて成り立つたさまざまの解答を、一般文化史と密接に關連せしめながら、事理的の經路を追つて、究明している。哲學史の頭腦を練るには、もつとも適切な書であるとおもう、と語つておられた。また、その敘述の含蓄に富んだ簡潔さを激賞せられて、「クローノー、フィッシャーが十頁位つかつて書くことを、ヴァインデルバントは一、二頁で書く」とも語られた。また、哲學の歴史について書かれたとき、「クローノー、フィッシャー及びヴァインデルバントに至つて、史と理との相互滲徹は、各自特徴ある形をもつてではあるが、ほとんど完成の域に達した。但しこれは決して彼等の業績が内容的に完全であるという意味ではない」と述べておられる。

先生がその著作のなかで、特にヴァインデルバントの名前をあげて、賛成または反對しておられる箇所は、それ／＼興味深いものがある。しかし、それらの箇所については、むしろ先生の哲學史を主として取り扱う方が、私にはふさわしいようにおもわれる。けれども、先生の哲學史について、哲學史學的に何かを述べるといふことは、實に大變な仕事である。また、八十年の長い御生涯のほとんど大部分を、あの冴えた頭腦とねばり強い根氣とをもつて、西洋哲學史の研究にささげられた先生の御

勞作を、私のようなものが仰ぎ見ている姿は、まさに「葦の腦から天井のぞく」姿であらう。今は、私の「よしのずい」にたま／＼入り來つたいくつかの箇所を述べて、先生をおしのびするよすがとしたい。

先生の哲學史の一般の特徴は、各哲學體系間の事理的發展關係を、透徹した内在的批判の論理をもつて、剝明に展開していることであるとおもう。勿論一般文化史的並びに個性的藝術的因子をも充分に顧慮して、時代の特色や個性の獨自性をあざやかに描き出しておられるが、各哲學者の一般哲學史上の位置、すなわち各哲學體系の哲學的及び哲學史的意義の判定に最も力を注いでおられる。驚效に價することは、そのねばり強い根氣である。先生はこれを例の濫い表現で、「ポロつくろい」と呼んでおられたが、これは勿論先生の嚴密な學問の良心のあらわれである。

また、先生の哲學史研究の特徴の一つは、上に述べたことと關連しているが、體系系に匹敵するほど、思索に思索を重ね、各哲學者の問題を自分の問題として考えに考え抜かれたことである。何時か先生は「自分でものを考える者でない」と、よい哲學家にはなれない」と言われたことがあつた。しかし、こうしたことは、めつたに口にされなかつた。哲學と哲學史との關係についても、先生はお若い頃に「哲學と哲學史」という題で書かれた（『哲學と人生』の巻頭論文）以外には、何も公表しておられない。しかし、ときおり「體系系は横に見る、歴史家は縦に見る」とか「哲學家は自分の考えをひとにしやべらせる」

とか「哲學史家はひとに批評させる」とか例のユーモラスな口調で寸言をもらされることがあつた。たしか、お茶の間で先生のお誕生祝いをなさつた時だつたとおもう、例の御愛用の小さなグラスでお酒を味いながら「哲學史家は酒をきく方で、醸造元じゃない」と笑いながらおつしやつたことがあつた。また何時か、ヴィンデルバントの「哲學入門(概論)」が話題となつた時、「しかし、あゝいう風に早くからヘルベルトのダス・リアーレなんていうものが出て来て、讀む者におかしくあらん。やはり、哲學史的にやうつと見て行つて、あゝいう考えがどうして起つて來なければならなかつたかといふことがわからなければ、あそこところは理解できまいと思ふ」といわれて、少くとも並行的に、一般哲學史を學ばなければならないことを力説されたが、例の誰い調子にもどつて、「まあ、ぼくなどは縦に時間的に見る癖がついてしまつてゐるからかも知れん」とおつしやられたこともあつた。しかし先生はやはり「横に見る」傾向の強い、すなわち体系的な哲學史家であつた、とおもう。たとえば先生の「カント哲學序説」の前半は先カント近世哲學史を体系的に整えて「横叙」したものである。

先生の哲學史はルネッサンスからカント哲學序説までしか完成されなかつたので、その他の時代に關する晩年の先生のお考え(「一般哲學史」での輪廓的素描以上の)については、完成された部分のなかで事理的關連の上から關説されている箇所に移る以外に道はないのである。

先生の哲學史の中心は、もちろん、カント哲學である。先カ

ント近世哲學を理性論と經驗論との二大潮流にわかつ分け方は、現在では最も普通の分け方であるが、これは明らかな形では、おそらくクローノーフィッシュナーにはじまるものであろう。しかし、この對立の根據をルネッサンスに成立した數學的自然科學的方法的自覺の結果と考ふる點において、先生はヴィンデルバント的である。そうして、このことと密接に關連して一般的にカント以前の近世哲學を自然科學的世界觀として性格付ける(カントにつづいた十九世紀の哲學を歴史的世界觀と性格付けるに對して)觀方も大體においてヴィンデルバント的といふことができる。

しかし、ダ・ヴィンチからガリレイにいたる數學的自然科學の哲學史的意義の重大性については、先生はヴィンデルバントよりはるかに高く、これを評價せられる。したがつて、この部分の敘述は極めて詳細であり、主なる參考書としてはマールブルク學派のカツシールの「近世哲學及び科學における認識問題」等を精讀しておられる。同じマールブルク學派のフォールレンデルの哲學史もこの部分に詳しいが、しかしその哲學史的意義の判定に關しては、全然異つてゐる。この點においても、先生は、マールブルク學派の(自然)科學哲學から充分に學びながら、大體はヴィンデルバントの方向に向つておられる。然るに、この數學的自然科學はルネッサンスの原典研究にもとづく本源的プラトンの復興に據るものである。即ち、プラトンが、一國家篇において、全然認識論的、體系的の見地から提唱した自然認識の理念の具體化に外ならない、と先生は考えられる。プ

ラトンが「ポリテイア」において理念として提示した「運動學としての力學」が、ガリレイにおいてはじめて現實化した。「吾々は力學の歴史を跡づけてプラトンの遠見とガリレイの偉勳とを認めざるを得ない」と書いておられる。そのみではない、認識論的に見てもケプレルやガリレイは全然プラトンの「想起」説にもとづいている。「かの認識（遊星運動の法則の認識）を私の裡に呼び起したものは、天界の影響ではない。それはプラトン説に一致して、私の魂の露された深みに宿つてゐた、而してただ現實の目撃によつて呼び醒まされたものにすぎぬ。私が天體より受けたものは、唯、精神に本具せる力の最初の鼓舞にすぎぬ」というケプレルの言葉を先生は引用しておられる。私自身のプラトン敬愛も手傳つて、おもわず詳しくなりすぎたが、最後にもう一箇所、大切なところを引用しておきたい。先生自身の「哲學史の中軸」を明示する箇所であると信じられるから。

「この期の數學的自然科學が、古代及び中世的先入見を次ぎ次ぎに離脱して來たに拘らず、認識論上プラトン説のみは結局までその基礎に置いて居る、といふ事實は銘記されねばならぬ。このプラトンの契機は近世大陸理性論の諸體系を通じて繼承せられ、カント哲學に至つてもなほ——多少の度において絶えず結びついて居た形而上學的要素を引き離して——その基礎的因子を形造つて居る」。

此處にきわめて明瞭に、西洋哲學史の中軸が、プラトニーカントであることが、示されている。私自身、常に銘記に努めて

いる箇所である。

次に、大陸理性論のうち、まさデカルトについては、哲學史の敘述以外に、名著「デカルト」にデカルトの省察録がある。「デカルト」は、近世哲學の祖としてデカルトを高く評價しておられるが故の研究發表であつて、こうした點において、先生の研究並びに發表の動機は常に純粹である。なお、デカルト個人の性格付けについては、ヴィンデルバントの箇所（全然靈道主義の人と見る）をあげて反對し、他方その神を純認識論的原理なりとする點については、ヴィンデルバントを引用して賛成してをられる。「デカルトの省察録」は、先生が最も樂しい氣持で筆をとられた書物であらう。先生流の「批判的敘述」と藝術味とが渾然と融合している。哲學思索への入門書として好適の書である。これもこの書に限つたことではないが、先生は「翻譯」よりは「批判的敘述」（先生は何時もクリティシシエ・ダルシュテルングとドイツ語でいわれた）が自分のためにも讀者のためにもよいとして、勧められた。たゞ、すぐ何時もの謙い表現にもどられて「ほくは譯者が苦手なので、そう考ふるのだらう」とおつしやられた。次に、マールブランシュをスピノーザの後におくヴィンデルバントの扱い方には賛成されなかつた。晩年「マールブランシュとライブニッツは、もつと詳しく調べて見度いのだが……」と言つて研究を勧められた。スピノーザは大體研究しつくしておられた（オランダ語本も読んでおられた）さうである。たゞスピノーザは冷い」と何度か言われた。先生はよくスピノーザとルソーとを兩極端として對比せられた。

先生とヴィンデルバント其他のドイツ哲學史家（とくにクローネー、フィッシャーなど）との最も大きな相違の一つは、ロツクからヒュームに至る英國經驗論の評價についてである。ヴィンデルバント等は彼等を啓蒙哲學者のうちに數え入れるが、先生はこれを「認識批判に對する彼等の業績の重大な意義の過小評價である」として「ホッブスからヒュームに至るまでの認識批判の哲學的及び哲學史的意義の重要性を認めて」彼等に多くの頁をさいておられる。先生は晩年ホッブスの認識論を（政治學との密接な關連を中心として）研究しておられた。

先生の「近世哲學史第一冊（即ちルネッサンス、及び先カントの哲學）」はルソーをもつて終つてゐる。私が京大の一回生としてお聴きした時（昭和二年）は、ドイツ啓蒙哲學が近世前期の終りで、カントにつづくようになつてゐた（ヴィンデルバント等のように）。然るに、先生はその後、ルソーのカントに對する影響が、哲學史的に見ても、豫想外に大きいことを發見せられて、そのためフランス啓蒙哲學とドイツ啓蒙哲學との順序を種々の不適當な點を忍んで、逆にして、ルソーを先カント近世哲學からカント哲學への轉回點に立たしめ、ルソーに重大な哲學史的位を與えらるゝに至つたのである。思い起せば、昭和十七年の夏、愛宕山ホテルの先生（先生はよく夏休みをあの山上ですこされた。双眼鏡で野垂をながめたりして、よろこんでおられた）からおたよりがあつたので、お伺いすると、先生はその夏中ルソーに没頭しておられたような御様子だつた。そこで、その年の十二月號の「大谷學報」に先生の「ルソー小觀」

が發表されたのであつた。（先生らしい謙い表題だ）。太平洋戰爭中、先生の公表された唯一のものである。

先生が哲學史として公刊せられたものは、上にも述べたように「ルネッサンス及び先カントの哲學」たゞ一冊である。うすい紙にこまかい活字でギッシリ印刷されてはいるが、とにかく一冊のうちに、これほど豊かな内容をふくんでゐる哲學史は容易に見出すことはできないであらう（今後も）。恩師ヴィンデルバントの「近世哲學史」上巻をも凌駕してゐるようにおもわれる。本書は、結局は、カント哲學研究への誘導書であり、したがつて、眞の意味の哲學入門の役目をもなすものである。私は先生のこの講義を京大で一度、谷大で二度（昭和十七・八年度、それ以前はギリシア哲學、お聴きした。これ等のノートやプリントに、岩波講座（七年）で發表された分と公刊本とを合わすと、五種類になる。京大でのノートから公刊本までの發展を辿ることの楽しみは今にはじまつたことではない。（公刊本の特色の一つとしてボエーメの詳述に注意したい）。

本書につづいて、「カント哲學」が一冊を占める豫定であつたのであるが、老齢のために、ついに完成に至らなかつた。しかし、「哲學史的小品」の「カント哲學序説」がそのはじめの部分であつて、これと「先驗的感性論」とが一緒にプリントにされたものには、その表紙に「朝永博士近世哲學史講義案（一）」（未定稿要略訂）と書かれてゐる。「序説」の部分無理に御願ひして「哲學史的小品」に收めていたゞいたのであつた。カントに關する先生の御講義としては、私は、京大二回生の時

「カントの認識論(第一批判全部にわたる)を、大谷大學で(昭和十七年度)「カント哲學(傳記から感性論まで。上述のプリンツを増訂されたものの口述)をお聴きした。別に先生には、周知のごとく、名著「カントの平和論」がある。哲學史家としての先生のいわば環形的現われと見ることが出来る。この書については、数々のなつかしい思い出があるが、「哲學史の思い出」には不適當であらう。

先生の「カント哲學解釋は、大體においてヴァインデルバント的といふことができよう。先生は谷大でカントの「純粹理性批判」の演習をなさつた時「私の考えはヴァインデルバント的で古いかも知れないが、ヴァインデルバントの書物を一番よく読んでいるし、ついでいたこともあるので……」と言われたことがある。私のテキストの欄外に、この言葉を誌して、「朝永、昭和十七年五月二十九日」と註じてある。「第二版序言」の所謂「コペルニクス的轉回」のあたりである。私は谷大で四ヶ年間先生の第一批判書の演習に出席した。私たちの京大在學時代には、先生はまだ充分に健康を回復されず、講義だけを受け持つておられた。三回生の時はギリシア哲學(アリストテレスまで)の講義をお聴きした。二回生の時の特殊講義の試験は、プラトンの「國家」がカントの「プロレゴメナ」かのどちらかを選んで自分で讀んで行つて受験するのであつたが、私は丁度その頃、菊池先生宅のヘラス會で「國家」を讀み上げる筈になつていたので「プロレゴメナ」の方を選んだ。それで、演習では、天野先生がカントの「第一批判」を、講讀は、九鬼先生がベルグソンの

「意識に直接與えられているもの」を教えて下さつた。(私が卒業後の放浪生活からまた京大にもどつて來た丁度その頃に(昭和九年)、天野先生は倫理學の方に轉ぜられて、そのあとを九鬼先生が承けつがれた。私は同級だつた友人から間接に、先生が「三井君は○君とも×君とも學風がちがうから、九鬼君に附いて勉強したらよからう」とおつしやられたということも聞いていたので、京大ではおもに九鬼先生の講義や演習(ベルグソン)に出席していた)。

先生がカント解釋についてヴァインデルバント的といわれたのは「カント哲學の方法」が問題となつた時であつた。(先生は方法の自覺を極めて重視し、デカルトが近世哲學の祖とせらるゝのも主として、これにもとずくとされた)。そうしてカント哲學の方法を批判的または先驗的方法と稱し、カント自らかく呼んだとしておられた。現に「カント哲學序説」の現行版(二十三年版)にも、そうなつてゐる。ところが、その後、先生はカント自身はそう稱していないことを學ばれて、このことを手澤本に註せられた時「初版では、カント自ら此方法を先驗的と呼んだとなつて居た。これはフアルケンベルク(書名略：三井)ヴァインデルバント(同上)に従つたのであるが云々」と記された。(フアルケンベルクとヴァインデルバントとはロツツェの相弟子である)。しかし、「分析と綜合」の兩様の操作をひとつに結びつけたこの方法を一語で呼ぶには先驗的(又は超越論的)という語が最も適切であり、カント自らそう呼んでおらなくても、ロツクやヒュームの方法を心理學的と呼んで差支えないよう

に、さし支えは無いとしておられる。カントは、數學や自然科學の眞理性を事實として承認して、その先驗的根據の確証によつて、これ等を基礎付けたのではない。そう考える（マールブルグ學派その他のように）のは誤解であるとヴァインデルバントはいう。先生も、それだけならば、單なる「分析」の操作だけにすぎない、と考えられる。數學が眞理性を要求していることを事實として出發して、それが眞理であるための可能根據（時・空の先天直觀性）を發見し（以上分析の操作）、然らばこの可能根據が果して證明されるか否かの檢討（即ち「綜合」の操作）がカントの方法であつて、その檢討によつて可能根據が證明できなければ、その眞理性への要求は拒否されるのである（例へば學としての形而上學のごとく）。先生のカント哲學方法觀は、ヴァインデルバント哲學史（近世）に示唆を得て、これを更に發展せしめ體系的に整序したものである。「分析」と「綜合」との結合と見る考えはヴァインデルバントには見えない。但し、この「分析」と「綜合」の操作の關係は、學的認識、道德及び宗教、趣味の三領域においてそれ／＼異つてゐるところに複雑な問題がひそむのである。しかし、先生はこれを充分に展開せられず、お亡くなりになられたのであつた。先生の御明示ならびに暗示にもとづいて、これを充分に展開することは、遺された者の今後の義務であり、學志を報ずる道である。先生は「序説」の部分だけしか公刊せられなかつたのであるから、「感性論以下についてはプリントや講義のノートによる外けない。しかしまた、公刊を肯んじられなかつたものを、先生の説又は考えと

みなすわけにはゆかない。たゞ「感性論」だけはちがうとおもふ。いつか私が、カントだけは公刊しておいて頂き度いと、お願い申し上げた時、「それは、のこしておく。ほくはこれでもまあ、仕事はしたつもりだ。年をとつた頭ではよいものはできぬ。カントにもわるいし……」とおつしやつたので、せめて認識論（狭義の）だけでも（立派なプリントや講義のノートがあるのだから）と重ねてお願いした時「分析論のところは、感性論のところ位に仕上がれば、出してよいとおもうが」といわれた。したがつて、先生は「感性論」は大體いままでのよいと考えておられたのだ、とおもう。しかし、私の所持しているのは、一番新しいのも昭和十七年度のノートである。

この「感性論ノート」において、先生は「感覺を時間的、空間的に秩序付けて現象界を成立せしめる」という場合の「秩序付ける」とか「成立せしめる」とかいうのは「多様に對し外よりして形式を強要する」という意味では決してないことを詳説され、「その根據は多様そのものうちに見出されると考えられねばならぬ」として、「そうでなければ、それ等の限定は何等の客觀性をも有せず、全く恣意的となり終らざるをえぬであらう」、「多様そのものには、主觀の如何ともすべからざる性がそなわつてゐる。たゞ認識が成立せんがためには、それはいわば主觀の言葉に翻譯されねばならぬ。翻譯の原理はこの多様の性よりは獨立に主觀に存せねばならぬというのである」、カントの現象論は「現象の根底に常にディング・アン・ジツヒを認めてゐる。カントのディング・アン・ジツヒの概念については、後

に關說せらるべきさまの異説が成り立ち得、且つ現に成り立っているが、とにかく所與の質料が形式上如何に整序せらるべきかの根據は主觀の側に存せずして所與そのものの側に存せねばならぬことは確實である」と述べられた。この點、先生はリールの實在論的傾向に近いようにおもふ。このことについても、いろいろ思ひ出があるけれども、それはカントばかりでなくフイヒテ其他にも關係しあまり細かい理詰めの話になるし、それに私自身はつきり先生のお言葉の意味を再現できる自信がないので、私だけのものにしてしまつておくことにする。

更に、この「ノート」において、先生はヴィンデルバントの哲學史をもう一度、あげておられる。即ち、カントが時間・空間論の必ずしも論理的歸結とは言えない現象論を、主張したのは一つには勿論二律背反論でその根據が補充されると信じたためもあるが一つには實踐的要求によつて冥々のうちに動かされていたためである、とするヴィンデルバントの解釋とともに根據あるものとして承認しておられる。その實踐的要求とは即ちこの感性界は我々の理想が完全に満たされ得べき眞實の世界でない。「眞實の世界は超感性的でなければならぬ」という確信を述べておられる。

最後にカント哲學全體についての先生の輪廓的性格付けについて。「學としての哲學」はどこまでも「認識論」であつて「形而上學」ではない。「形而上學の世界は認識によつて到達し得る眞實の世界ではなくして、良心的行によつて現われきたる世界である」。但しその「認識論」は單に第一批判即ち狹義の所謂

朝永博士追憶

「認識論」をいみするのではない。「この超個人的理性はカントにおいては廣義において認識論的のもの(認識・實踐・趣味の三領域にわたつた先天的綜合判斷の主)であつた」、「認識論的性格はカント哲學の全體系を貫通した基礎的特徴を形造つてゐる」と晩年に述べられた意味における認識論である。先生が「一般哲學史」の終りのところで「新形而上學派」と「新カント派」との二派をあげ、新カント派について「カントの認識論的面を重視する」と形容しておられるその「認識論的面」はヴィンデルバントの精神をうけつがれた先生にとつては、上述の「廣義の認識論」でなければならなかつた。ヴィンデルバントにお逢いになるまえの先生は、前にも述べたように、大體において「新形而上學派」的であつたと言ひうるであらう。後年の先生の形而上學、先生の宗教をさするためには、先生の「行」そのものに、まのあたり接しなければならぬ。

永遠の光が私を照らすのは、知識においてではなくして、真心においてである。 — ヴィンデルバント —

(一九五二・九・五)

## 二 別 離

この小文は、昨年の十二月號の「全人」にのせたものであるが、「哲學史の思ひ出」と合せて見ていただきたい、  
「哲學研究」編輯者の御好意によつて再録した。

昨年の初夏、私はなが年住みなれた京阪の地——先生の御膝もとをはなれて、この玉川の丘に居を移すことになつた。家を



ひきはらう前日、忘れもしない六月五日の午後、先生の御宅にお別れの挨拶に上つた。ひとつ手前の停留所、熊野で電車を降りて、明るい青葉並木の歩道を歩いたが、何時もとけ反對に、私の足は重かつた。「ひよつとしたら、これが最後になるのではないか？」しかし、小原先生御發案の先生の御講義を中心とする「京都教室」の件も、漸く先生の御承諾を得ることができたし、そうすれば學生諸君と一しよに來られる、それに小原先生は、朝永先生御在洛中は一短期に一度位は必ず京都出張をさせて上げると御親切に言つて下さるし、京阪地方を離れても、先生は未だ御元氣だから、今までのように一週に一度少くとも一ヶ月に一度という程までにはいかなくても、度々先生にお目にかかることができる。専心研究を認めて下さる玉川へ行つて、長い間、實に長い間根氣よく先生がお待ち下さつていられる仕事を早く完成發表することが、先生の御慈愛に報いる道だ、そうだ、先生は何時か「わたしはもう何時死んでもよいとおもつている。ただ心残りなのは、君のことだけだ」とまで仰言つて下さつたではないか――

こんな風に考えて、自分を勵ましながら、小さい家々が建て込んでいる細い路地に入つて行つた。先生はこの近所の人々に深く愛し親しまれている。全く「市井の哲人」だ。先生の御宅は、何時ものように、先生と與縁と御二人きりの清らかな静けさに冴えている。しかも何ともいえない温い親しさにみちている。先生は何時ものように落ちついた慈愛にあふれた御瞳みに微笑を湛えて「いいよ、行くか。ちよつとさびしくなるな。ま

あ、からだを大事にして、しつかりやりかけの仕事を仕上げるんだね」と言つて下さる。それから、「此頃は、玉川は青葉で楽しいだろうね。玉川へは、この前上京した時、波多野君の病氣見舞で行つたことがあるが、脚が言うことをきかないので、残念ながら與の方までは行けなかつた。一度是非學園を見たいのだが」と仰言つて、玉川のことをいろいろ御訊ねになる（五月にすでに私は單身赴任していたので）。

床の間には、西田先生の書「外國の青葉の下に同居してギリシャの酒を君飲むらんか」が掛つている。歌のはし書に「渡歐の朝水學兒に」とあるのを見て、私は驚いた。私はかねてから西田先生の「續思索と體驗」のなかにあるこの御歌が好きで、或る時とうとう下程君に「西田先生にお願ひして、この御歌を書いていただいてくれないか」と頼むと、彼は「ぢや、一つしよに行こう」と言う。西田先生は家妻の里の家とは同郷で親意であるのだが、偉い方に初対面する勇氣に乏しい私は、ついにお伺いせずじまつた。この御歌のはし書は、書物では「ハイデルベルヒの郊外の旗亭に、ギリシャの酒をひさぐものありと聞き、渡歐の友に」とある。大正十二年の作中に入つているから、大正十二年朝永先生がドイツに出張されたことを知つていた私にとつて、この「友」が先生である位のことには容易に想像できる筈であるのに、この時まで私は全然気がつかなかつたのであつた。

私はこのいきさつを先生に申し上げて、「そうですか、この友は先生でしたのですね。うっかりしておりました。そんなら、

なおのこと、我慢してお伺いして、書いていただくでしたのに」と言う。先生は「君はひつ込み思想家だからいかん。どんな京大の先生方や先輩の方々のところにも行くようにするが、いい」と何時も言われることを仰言つた。それから、前にもお伺いした時に掛つていたやはり寸心先生の書「古人知苦光明必盛大」のことを私がお讀ねすると、「あれはね、振一郎が東京に行くとき、何か書いてやつてくれと私から西田君にお願ひして、書いていただいたんです。ところが振一郎は、あれを見ていると苦しくつてしかたがない、というので、ほかのをやつてあれをこちらにおいてあるんだが、西田さんの日記「明治三十一年」にも出ている慈明の言葉です。慈明の言葉の力で苦しくなるのか、西田君の筆の力で苦しくなるのか。大拙君にきいて見たら『そりア、西田の力だらう』と言うんだが」。

そのうち話はまた私の玉川入りのことに戻つた。私は以前、京大や谷大の講師をしていた時代に、いろいろ悩んだ末、小學校の教師になる決心をして、このことを先生に御相談申し上げたことがあつて、その時は先生は「氣持はよくわかるが、今からではもうおそすぎはしないか。それに、勉強と兩立するかな？ やはり、今までやつて来た仕事を完成することに専念した方がよいとおもう。これはあなたの友人としての私のアドヴァイスだが」と御さとし下さり、結局私はその決心をひるがえしたのであつたが、それで氣がらくになつたわけではなかつた。ところが先生は却つて私をしつかり勉強させるために、ドイツとのドツェンテン・アウスタウシュに推挙して下さつた。幸い先生

のお骨折りでパスし、私はチュービンゲン大學を目指して準備していたが（ハイデルベルヒは當時すでにナチスのために所謂ハイデルベルヒ派の人々の根城ではなくなつて）、しかし、このことは獨ソ戰開始のため、取りやめとなつた。その後、學徒出陣のため、兩大學の職を私が失つて以來、先生の私に對する御配慮は全く御禮の申し上げようもないほど廣く深いものであつた。しかも先生は何時も私たちを弟子としてではなく、友人として遇せられた。この點先生はソクラテスの親鸞的であつた。しかし私にとつてはもとより恩師である。この恩師は次第に知己ともなり、無二の親友ともなり、さらに戰爭のため私の郷里（樺太）の家が潰滅してからは、嚴父ともなり慈母ともなつて、ただに私のみならず、私の家族たちの健康、私の住居や經濟上の問題まで御心配下さつた。この時も何くれとなくいろいろ御案じ下さる。私はこれ以上、御老體の先生をわづらわし申し上げてはと思ひ、玉川が最も私に適したところであること、いわば私の仕事の完成と以前先生に申し上げた決心とが兩立し得そうなところであること、それに第一、美しい自然に囲まれた學内住宅で、今までのような往復四時間もの時間と心身疲勞とのロスなしに、好きな事に専念できるし、子供たちの教育にも健康にも非常によいことなどを申し上げ「ただ先生のもとをはなれることが」「いや、私のことなどは氣にしないで、仕事をまとめることに専心するように、そればかり願つてゐる。僕もね、まえにも一寸お話ししたことがあるかとおもうが、京大をやめようと決心したことがある。僕は一高時代に内

村鑑三の影響でカーライルなんか讀んで、それでまあ哲學に入  
るようになったので、卒業後學者とか教授とかいふのではなく  
評論家になりたいと思つていた。ところが京都大學から來い  
つて來た。直ぐ留學されるというんで、まあ、西洋に行ける  
というのが魅力で來たのだが、西洋から歸つた年、大正二年に  
教授になつた。ところが西田さんは「善の研究」から出發して  
あんな立派な仕事をされたが、僕は「自覺史」から出發して、  
ただ一生ボロつくろいに終つてしまつた。これはまあ僕の懺悔  
話だが、遺言のつもりで聞いてもらいたいと思つてます。ドイ  
ツでヴェンデルバントについて見て、僕のような力ではとても  
大學教授など勤まるものではないと痛感したが、まあ努力して  
みようといふ懸命やつてみたが、どうも良心が苦しくて仕方が  
ない。そこで、とうとう、大正八年に澤柳さん——まあ當時の  
教育界のボスだね——のところへ行つて、良心が苦しいので辭  
め度い、どこか行先はあるまいか、と言つと、行く先はこしら  
えてやる、小西、西田、藤井の三人の人に相談して、この三人  
がよいというならば、探してやるという返事だ。ところが藤井  
小西の兩君は「そんなことをいうなら、僕たちもやめなければ  
ならぬ」「そんなら君たちもやめろ」というような書生風の議  
論になつて了つてラチがあかない。そこで西田君のところに行  
つたのだが、書く方が厭つきりするから、手紙をやると言つ。  
そつして手紙の往復があつたわけです。

そう言つて先生は立つて睡室に行かれた。しばらくして封書  
を手にして入つて來て坐に復せられた。そしてそれを手にもた

れたまま、今の御話しをもう少し詳しく話され、出來ようと  
していた行先は松本高等學校で、「信州の松本」というようなとこ  
ろへ行つて、自分の思う存分のことをし度いと呑氣な考えをし  
ていた。それで、西田君のところにいき、いろいろ、こんこん  
と言われたが、志しをくつがえさずに、うちに歸つてきていた  
ところが、こういう手紙をくれたのです」と仰言つて手にして  
おられた三通の手紙の一通をテーブルの私の前のところに置か  
れた。私は黙つて、しばらくそれを見ていた。すると先生は  
「よく行き届いた手紙なので、焼いた方がよいのだが、とつて  
おいたのです。此の間、西田さんの書簡集を出版し度いといつ  
て岩波の布川君が來たので、寫して行つて貰つたが、他には誰  
にも、話しても見せてもおけません」。そこで私は先生のお許し  
を得て、封筒から出して見ると、便箋五枚の御手紙であつた。  
まことに情理兼備の、深い友情にあふれた書信である。そのな  
かには、

「すぐ教授にでもする位の人にて、君の外に今時に人がある  
とは思はぬ」。

「君の去ることによつて小生が最も遺憾に思ふのは此大學の  
哲學科よりして事を處する材幹あり且つ一種の氣風を維持する  
に賴しき一人を失ふことである」。

という文言がある。日附は十月九日である。

先生は私が一讀し終るのを見られて、御手もとのもう一通  
を、未だ私の前にひろげられたままで重ねてあるさまの書信の  
横にならべて置かれながら「その次に、こういう手紙を。そち

らのに對して私が返事をしてるので、それに對してこういう事を言つて密こしたのです。

それは便箋二枚の書信で、最後に、

「相談相手といふものは考へ様によつていくらでもできるかも知らぬ、併し人情は左程單純なものとは思はれない、余の妻よりはよき妻は多かるべく、余の友よりよき友は多かるべし、併し余の妻は余の妻にして余の友は余の友なり 十月十日」とある。

この二通の御書翰を、私が再讀しはじめると、先生は坐を立たれ、私がくりかえし拜讀している間、靜かに座敷のなかを歩き廻つておられた。私は、何時か先生が京大をやめられる決心をされたことがあることを話されて、だが、西田さんがねえと仰言つて言葉をとぎらせ、眼に涙を浮べられたことを思い出していた。あの時先生はあれつきり何も仰言られなかつたし、私もとてもお訊ねするような氣にはなれなかつた。そして、其後ずつと西田先生のどのようなことが朝永先生の御決心をひるがえさせ、京大に止まらしめたのであるか、いろいろと想像してみていたのであつた。西田先生の友情を想う朝永先生の涙。西田先生があの時京大におられなかつたならば、朝永先生はあの時必ずや京都を去つて信州に行つてしまわれたことであらう。そうして、大正八年以後京大哲學科に入學した者は、朝永先生を「恩師」と御呼びする運命をもつことはできなかつたであらう。私は運命の不可思議に驚異し攝理のありがたさに感謝せざるを得ない。

あの日は、それから「お別れに一はいやろう」と仰言られて

朝永博士追憶

車様の御心づくしの御馳走で「送別の宴」をひらいて下さつた。御愛用の小さなグラス二三杯のビールで陶然とされて、私の間に應じていろいろ想い出話を、幼年時代から留學時代にわたつて、お話し下さつた。ハイデルベルヒのネッカー河畔の童生にねころんでおられる御眞實を出して來られて「ハイデルベルヒにはうまい酒を飲まずところがあつてね、其處には素純な乙女がいて酒をついでくれる。南ドイツの乙女はいいね、ゲミュートリッヒでね」と「ゲミュートリッヒ」と言われた時は「いたずらつて兄」のような眼をして微笑された。このようなことは後にも先きにもないことであつた。そのうち御茶の間の柱時計が九時を打つたので、私はあわててお暇ごいをしたのであつたが――

その後も、私は先生に何回もお逢いしている。この夏も二回つづけてお伺いしたが、二回目の時は、涼しい先生のお宅でさえ九十二度という暑さで、先生もかなり御疲れの御様子だつたので、「また秋にかならず参りますから」と申し上げて、かつて無い重苦しい心残を感じながら、あの滞り戸をとぎしたのであつた。しかし、その「秋の参上」は先生の御葬儀に列する上落となつてしまつた。先生の御手紙にも、「二回目の時は何か御話したいことがまだ残つて居る様な氣がいたしました」とあつたのに。あの日の御話はお言葉通り御「遺言」となつてしまつた。

今はただ「報恩」の一道あるのみである。

(一九五一年・一一・五)

（筆者 玉川大學文學部「西洋哲學史」教授  
元京都大學文學部「西洋哲學史」講師）